
彼氏彼女の日常 連載版

NATA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼氏彼女の日常 連載版

【Nコード】

N67690

【作者名】

NATA

【あらすじ】

暇が大嫌いな彼女。そんな彼女はいつも俺に迷惑をかける。

彼氏彼女の日常 連載版（前書き）

小説に関するものと一年振りの投稿。面白いかどうか分かりませんが、よろしく願います。

前に連載にしてまとめたほうがいいとアドバイスもらったのでここから連載版に変えてみました。全部まとめようとすると作品を消しそうで怖いので……

彼氏彼女の日常 連載版

俺には彼女がいる。

彼女は暇を嫌い、よく俺をからかう。だがそんな彼女も優しい一面を持っている。

「つかれた」

現在、夜の9時を過ぎた頃、俺は朝の9時から大学のレポートを書いていた。

最近、家にはあまり帰りたくなかった。家に帰ればいつもの様に彼女にからかわれる

この頃、彼女にからかわれる事により、精神的に疲れが生じてきた。

だが、早く帰らないと行けない。メールで早く帰って来いと言われたから帰らなければいけない。完全に尻に敷かれている。俺は急いで帰り、自宅の玄関前に着き、ドアを開けた。

「ただい……」

『バーン』（爆発音？）

「ハッピーバースデー、お誕生日おめでとう」

しばし呆然とする。そして思い出す。

「ああ、そっか今日は俺の誕生日か」

「やっぱり忘れてた。待ってたんだよ」

彼女はすねたように言った。でも、それは可愛らしいすね方だった。

「朝から大学お疲れ様。早速ご飯にしましょ。あ、でも、疲れているかでしょ？肩もんであげる」

俺は嬉しかった。こんなに彼女に優しくされたのは付き合った当初ぶりだった。

俺達二人は居間に入り、さっそく肩をもんでもらった。

正直、彼女は力がなく、そんなに気持ち良くなかった。だが、彼

女の優しさに俺は疲れは取れていった

その後、彼女は手料理を出してくれた。

しかし、俺が大学近くにあるマックでご飯を食べてしまい、正直、あまり空いてはいなかった。

だが、彼女の気持ちを無下にする訳にはいかず、無理して食べた。そして、一時間程度胃の休憩をしたあと、メインディッシュがやってきた。

「さあ、メインディッシュのケーキを食べましょ」

彼女は嬉しそうな笑顔でケーキを取り出した。そして、自慢げに言う。

「今日の自信作だよ。クリームといちごにもこだわった物を使っています」

彼女はまるでダンスをするかのように自慢のケーキにロウソクを立てて火を付けた。

俺はそんな彼女を見ていると自然に笑みがこぼれたが、一つだけ疑問に残る事があった。

「なあ、一つだけ聞いていいか？」

「ん、どうしたの」

「ロウソクの数、明らかに足りないぞ」

そう、ロウソクの数が必要なかった。普通、年の数だけ、ロウソクを立てるはずだ。

しかし、ケーキに立っているのは10個しか立っていなかった。

大雑把に計算しても俺の年の半分程度しか立っていなかった。

しかし彼女は「これで合っているよ」と聞き流して部屋の電気を消した。消えた瞬間、ケーキの周りだけが全て世界だと思えるほどの部屋中が真っ暗になった。

俺は火を消そうとしたが、彼女に静止を掛けられた。

「それでは問題です」

「問題？」

「なぜ、このケーキには10本しか立っていないのでしょうか？」

「別に食べながらで良いだろ」

ガッン（打撃音）

「ちゃんと答える」

「分かった。だから愛用の電話帳で叩くなあ」

俺は考えた。

そして、答えを出した。

「この作者の10回目の投降」

「全然違います」

「じゃあ、降参」

早くケーキを食べたかった。しかし、彼女はこの問題にどうしても答えて欲しくて提案を出した。

「じゃあ、ロウソク一本消す毎にヒントを出すね。そして、全て消し終わってから答えを出すという事で」

「いいだろ」

ロウソクは10本はある。10回もヒントをもらえば答えられるだろ。

俺は一本ずつ消していった。そして、彼女が一つずつヒントを出す。

「さくら……椿……かすみ」

「花の名前か？てえ、電話帳を構えるな」

「最後まで消してから答える約束」

「分かった」

俺は火を消す。そして、彼女はヒントを出す。まるで皿の数を数えるように。

「みどり……あおい……すみれ」

「……」

俺はなんとなく答えが分かってきた。でも、火を消さないといけない。

「きよみ……はるみ……ともえ、つばさ」

ろうそくがすべて消え、真っ暗になる。周りが何も見えないほど、

そして、彼女いる方向から声が聞こえた。

「さあ、正解は」

「一年間浮気した数です」

彼女は優しい一面があるが、同時に怖い一面があった。

彼氏彼女の日常 連載版（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

気が向いたら投稿します。とりあえず、残り2本のストックがあるので2週間以内に一本出します。でわでわおやすみなさい。

パート8

窓からこぼれる眩しい朝日に俺は目が覚めた。

体が少し重かったが気分は上々に布団から身を起こした。体を伸ばしながら目覚ましの時計の鳴らない今日、一日を実感する。

「休みだ」

今日は久しぶりの休みだ。最近、大学のレポートやバイトに忙しくてゆっくり出来なかった。でも、当分は大学のレポートがないからゆっくり出来る。

とりあえず今日は寝よう。多忙だったから疲れて仕方ない俺はあおむけで布団に入った。だが、そんな事をお構い無しに俺の部屋に来る女がいた。

それは俺が寝ているのを知っているはずなのに、わざわざ、大きな足音を立てながら自分の部屋のように、堂々と入り、布団の近づき止まった。見えてはいないが声で俺の事を見下ろしながら言っているのが分かる。

「暇です」

そうだよなあ。お前は暇だよな。俺がせっせと働いているのにお前の所はレポートが少なくバイトもしていないから暇だよなあ。だが俺は疲れているだから寝る。絶対に起きない。

だが、彼女は言う。

「暇です」

高圧的に言う彼女。『だから俺は眠い』と彼女に言いたい。しかし、そんな事したら自分が起きている事を彼女にばれてしまい、寝かせてくれなくなる。だから寝たふりをかます。

彼女は俺が寝っていると思って諦めたのか足音を立てて遠ざかっていた。しかし、彼女はすぐに俺の部屋に戻ってきた。そして警告をした。

「起きないと酷い目を見せますよ」

俺は無視して寝たふりをした。

それから数秒。俺の鼻と口に何かが塞がった。

最初は少しひやりとした。しかし、すぐに息苦しさを感じた。

俺は必死に息をしようとする、鼻から何かが音を立てて気持ち悪い物が進入してきた。出した鼻水が逆流したみたいだ。その進入が余計に息苦しさを感じ、俺を圧迫する。

そしてその息苦しさに耐え切れず、俺は起き上がった。

起きた瞬間。俺の膝にタオルが落ちる。触れると若干濡れていた。

俺は彼女の顔を見る。

彼女は爽やかな笑顔で「おはよう」と言ってきた。

爽やかな笑顔でさっきまで行為を忘れさせようとしているのがよく分かる。それはそれはとても爽やかな笑顔だった。しかし追求は忘れない。

「お前何をした」

俺は、少しドスを効かして言った。正直、いつものような軽口で言うような余裕ないほど苦しかった。

すると彼女は先程同じ笑顔で、

「中々、起きないから濡れタオルを……」

「濡れタオルを……」

「口と鼻に掛けてみた」

「殺す気か」

彼女は俺の回答に首を振った。少し、顔を赤らめ、手を頬に乗せながら……

「起きないから起こしたの」

「下手したら逆に眠るわ」

「いいから遊ぼうよ」

そうですね。彼女は暇だから俺を起こしたんだよね。そうじゃなくちゃ起こさないよね。だが……

「おやすみ」

俺は布団の中に潜る。

だが彼女も負けない。俺の体を揺らしながら、

「ねえ、遊ぼうよ」と言ってくる。

このままじゃ埒が明かない。俺は起き上がり、何して遊ぶか聞いた。
「とりあえず、何をするつもりだ」

それを聞くと後ろに後光が出てくるような明るい笑みを浮かべた。
思えば、この笑顔を見て付き合い始めたんだよな。そんな事は置いといて彼女は笑顔で何をしたいか答えた。

「岐阜城に行きたい。あんた城が好きでしょ」

「岐阜城？ 岐阜城と言えば、齊藤道三の居城で旧稲葉山城と言われた難攻不落の山城。しかし、羽柴秀吉が岐阜城の裏門を見つけ、あっけなく落城させた。その後、織田信長が小牧城から稲葉山城に居城を移し……」

「はいはい。その話は岐阜城に着くまで置いて、という訳で行きましょう」

彼女は手を叩いて俺の話を遮った。まだ、齊藤道三の息子の話と竹中半兵衛の逸話が残っているのに……

「というわけで岐阜城に行こう」

「断る」

「何で？」

彼女は少し頬を膨らませて言った。俺はそれについて答える。

「前、そことは違う城に行った時、城を見るのにすぐ飽きて近くの土産屋に行つてその後は食い物屋に行つただろ。俺はゆっくり見れないのが目に見えているか行きたくない」

「そんな、こんなに可愛い可愛い彼女が愛らしく起こしてデートに誘っているのに」

「濡れたタオルを鼻に乗せる事が愛らしいのか？」

「まあ、その部分は置いといて可愛い彼女がデートに誘っているのに行きたくないの？」

彼女は上目遣いで俺を誘う。あかん。女の子に上目遣いはかなりぐつと来る。抱きつきたくなる。そして何でも言う事を聞きたくなる。

だが……

「断る」

ここで言う事を聞いたら彼女のわがまを助長する事になる。こ
こは断って彼女のわがまは早々聞かない事をアピールしないに行
けない。

「そんな、私の事が飽きたのね。だから田中部長とメールばかりす
るのね」

「関係ねえよ」

「そんな訳ないわ。深夜の時でも暇な時にメールや電話しているじ
やない」

「仕事だよ。おまけに男だし」

「そんな、男と浮気していたのね」

「ホモじゃねえ」

「ならメールの内容に愛していると言っ言葉があるのはなぜ」

「いやそれは……」

やばい。彼女は俺の携帯メールを見てる。何度、ロックナンバーを
変えてもその度に破られる。彼女は俺専用のハッカーだ。言い訳を
考えないと……

だが思いつかない。しかし、このまま黙っているとどんどん状況が
悪化する。

「男と浮気していたなんてこうなったらあんたの友達に言ってやる」

「やめろ」

「うるさい。誰かに電話してやる」

やばい。これ以上誤魔化そうとすると自分の首を締めるだけ、いや
むしろ無くなる。

「ごめんなさい。浮気しました」

土下座して俺は謝った。とにかく彼女を落ち着かせないと自分の首
が無くなる。

「どこで知り合ったの？」

彼女はいつもの口調で言った。

「はい。バイト先で知り合いました」

「その子とはどこまで言ったの？」

「キスまでです。それ以上は言ってません」

「そう」

彼女はそう言っただけに座った。でも、まだ弁解していない事がある。

「でも、俺は男には……」

「男に興味が無いんでしょ」

「そう男には全く興味が……」

んー。ちよつとまで、彼女よ。今何て言った。

「あの……」

「ん。知ってるよ。この前、暇つぶしで書いた小説で『浮気相手は名字しか入れない』と書いたからあんたはそれを見た次の日から『部長』とか『係長』という役職名で誤魔化そうとしていると知ってるもん」

彼女は笑いながらそれを言う。俺は永遠に彼女に勝てないのかもしれない。

「ついでだけど、役職名が付いている人間が深夜にメールする訳ないじゃん。あるならプライベートくらい」

そうだよ。常識的に考えれば上司が深夜に仕事の電話する訳ないよね。俺は浅はか過ぎる。

俺は布団にもう一度潜った。しかし、彼女は布団を引き剥がして、
「岐阜城に行きたい」

「そうですか」

彼女はもう一度、「岐阜城に行きたい」と言った。

このまま、断っても彼女は言い続ける。それに、浮気の問い詰めが恐い。今のうちに機嫌を取っとかないと……

「行きましようか」

「うん」

彼女は笑顔で俺の部屋を出た。

俺は布団に出て着替えた。すぐに戻ってきて、

「運賃よろしくね」

彼女はそう言って俺の部屋を出た。

ああ、今月も生活がピンチか……

俺の嘆きを気にも止めず、彼女はウキウキとしながら出かけている準備をしているのだらう。

パート8（後書き）

どうもこんにちわ読んでくれている人いるのかな？ 暇なので適当に自分が読んでいる本の紹介でもしよう。

奥田英朗の『空中ブランコ』

この話は精神科医伊良部先生と患者二人のトラブルコメディ。毎回、違う患者が来るんですが、伊良部先生の天真爛漫？ 破天荒な性格に患者は振り回される。しかも患者本人は病気について真剣に悩んでいるのに当の伊良部先生は医者としてはありえない言動を言い、ますます患者は困惑する。

それにより、色んなトラブルが起きるんだけど、精神関係の話はけっこうヘビーな話なるんだけどこの小説は逆に笑いにしてしかもその病気について分かりやすく理解ができる。精神の病気と笑いを求めている人にはおすすめ。まあさすがに今はやりの鬱や統失関係は出ませんよ。けれどおすすめのなのは間違いなし。ちなみに関連本は3つあるのでご注意を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6769o/>

彼氏彼女の日常 連載版

2010年11月17日04時36分発行